

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

今日生きていられるのは、昨日、一昨日と毎日何かを食べてきたからだ。細かにいうと、一食ごとに自分の生命の元を仕入れているのである。だから食べ物は生命の元なのだ。生命の元だから、食べ物を大切に扱う。大切にすることは、尊重し、できるだけいい扱いに扱い、ムダを省くことだ。食糧が足りようと、足りなかりようと、いつもこうした心がけや姿勢で食べ物に接するのが正しい。生命の元を粗末にするのが正しいとは、口が裂けても言えないのである。その意味では、さかのぼっては、食糧の元になる様々な自然物についても、もつともっと大切にしなければならぬ。

「私の生命の元であるあなた（食べ物）を今から食べさせてもらいます。どうか十分私の栄養になってやってください。ではいただきます」

という食前の挨拶。

「これで私の生命の元を私に取り入れさせていただきました。カロリーも栄養も、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。ご馳走さまでした」

という食後の感謝の表明。

こうしたことを、まったく気づかなかつたり、知ってはいてもバカらしく、また照れくさいことに思ったりする。心でちよつ



食べ物を大切にする習慣

丸山竹秋

と思えば、姿勢なんかどうでもいいというぬぼれたりするなど、まちがった態度（これを非善という）でいることが多いのではあるまいか。

「日にひとつ よいことを」の実践は、朝起き、洗面、挨拶、食事などからスタートする。あたりまえのことをあたりまえにやれば、何も「よいこと」と銘打たなくてもいいのだが、現在ではそのあたりまえのことすら、行なおうとしないのである。つまり、食べ物を胃の腑に入れても、これが生命の元だとさえ思わず、感謝もせず、うまい、まずいの選り好みのエゴを一方的に押し通そうとし、神聖にして明朗愛和であるべき食卓のマナーを考えようともせず、むしろ未開人以下の状態であることが多いのではなからうか。

一時的にでも食べ物に恵まれると、たちまちわがままになり、あたりまえのことすら忘れてしまいやすい。食生活は、慎ましいほうがむしろ健康的だといわれるくらいだ。遠からずして人類が食糧不足に直面するであろうとの声を、私たちは天の警告と受け取り、今から自然を尊重し、生き物の乱獲を慎み、粗末にしないように心がけよう。そしてこのようにする人を、一人でも二人でも多くつくるのが、地球社会に対する自分自身の使命であると自覚しようではないか。その運動こそ家庭を、そして広くは社会を改善していく基盤ともなり、政治を動かすもともなるのである。

『繁栄の法則』より